

特集

整形外科医の災害対応のあり方

—能登半島地震の経験より—

2024年元旦に起こった能登半島地震は、正月の華やいだ空気のお茶の間を震撼させた。そして、翌日に起こった羽田空港地上衝突事故で、このまま日本はどうになってしまうのかと不安を感じた方も多いのではないだろうか。しかしわれわれ整形外科医は、ただ不安に苛まれるだけでなく、その特性を生かし支援者として立ち上がるべきである。そのためには、過去の災害で何が起こり、何が行われ、何が問題であったかを知る必要がある。

本誌においては、2000年（43巻）に1995年の阪神淡路大震災を踏まえた特集「大災害医療と整形外科」を、2012年（55巻）に2011年の東日本大震災を踏まえた特集「大震災を経験して一後世につたえるべきこと」をそれぞれ取り上げてきた。今回は、2024年能登半島地震において過去の災害における経験と反省が生かされたのかというテーマを中心に、災害医療に整形外科医がどう関わるべきかという観点で特集を組んだ。

今回、8名の先生にご記載いただいた。まず、石川県の災害支援体制の構築を最初に手がけたあさぎり台整形外科の高田宗知先生と能登の被災地内の受け入れ医療機関で活動した金沢医科大学水見市民病院の廣村健太郎先生に現地からの視点で生の意見をご記載いただいた。鳥取大学の生越智文先生には、日本整形外科学会災害対応委員会の立場で、武蔵ヶ丘病院の細川 浩先生には熊本地震の経験を踏まえて、みやぎ県南中核病院の伊勢福修司先生には東日本大震災の経験を踏まえて、そして愛媛大学の竹葉淳先生には今後起こるであろうとされている東南海・南海地震への備えという視点でそれぞれご記載いただいた。尼崎だいもつ病院の富岡正雄先生には、運動器疾患を扱うわれわれに関わりが深く、そして参考にすべき団体の活動として日本災害リハビリテーション支援協会（JRAT）の活動について、最後に国際協力における整形外科医の役割について兵庫県立はりま姫路総合医療センターの水田宜良先生にご記載いただいた。

同じ災害は二つとない。その後の同年9月に起きた能登半島豪雨災害を誰が予想しえたであろうか。日本整形外科学会に災害対応委員会も立ち上がり、整形外科医に対する災害教育も広まりつつある。この特集が、今後の災害において被災者支援の一助となることを期待する。

（黒住健人）